

にうなつけば、てにむすびてのます、さておてのぼりにけり、おとこはかなく成にければ、もとの所へかへりゆくに、かの水のみし所にて、

大原やせかいの水をむすびあげてあはやととひし人はいづらは

又神樂取物の中に杓歌

大原やせかいの水をひさごもてとるはなくともあそびてゆかむ
これはいづこのほどにあるにか、大原におぼろのゑみづ、せかいのゑみづあるにこそ、然者おぼろのゑみづは、大原にあれど、もとのめにもよせてよむべきにこそ、野中のゑみづは、いなみ野にあれど、さやかによみたちぬれば、水題などにはいともよます、おぼろのゑみづはその心ならねど、みなよみ侍めり、

〔江戸名所圖會十三〕子安清水 同所長光山妙典寺にある所の池をいふ、旱魃にも涸れずといふ、相傳ふ。日蓮大士此池水をもつて安産の符を書給ひ、時光が妻に與へられし加持水なりといふ。
〔古事記景行〕於是零大冰雨打惑倭建命○略註 故還下坐之、到玉倉部之清泉、以息坐之時、御心稍寢、故號其清泉謂居寤清泉也。

〔日本書紀景行〕四十年、是歲略中日本武尊更還於尾張、即娶尾張氏之女宮賣媛而淹留踰月、於是聞近江膽吹山有荒神、即解劍置於宮賣媛家、而徒步之至膽吹山、山神化大蛇當道、爰日本武尊不知主神化蛇之、謂是大蛇必荒神之使也、既得殺主神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行時、山神之興雲零水、峯霧谷曉、無復可行之路、乃接遑不知其所跋涉、然凌霧强行、方僅得出、猶失意如醉、因居山下之泉側、乃飲其水而醒之、故號其泉曰居醒泉也、

〔日本鹿子八〕同國江近名所之部

醒井 岩根よりわき出る水也、東より南へ流たり、石地藏水の中にたち給也、此井をさめが井